

2 色づくり指南

色づくり指南 1 調和しやすい色彩の組み合わせ

色彩には調和しやすい組み合わせの原則があります。色相の近い類似色を使用したり、色相や明度と彩度の組み合わせによる色調をそろえると調和しやすい組み合わせとなります。背景の色彩との調和を考えると、複数の色彩を用いるときに活用できる方法です。

●色相をそろえる

色相をそろえて明度や彩度に変化を付けた色彩を組み合わせる方法です。



●色調をそろえる

明度と彩度の組み合わせによる色調（トーン）をそろえて色相に変化を付けた色彩を組み合わせる方法です。



色づくり指南 2 外壁と屋根の色彩

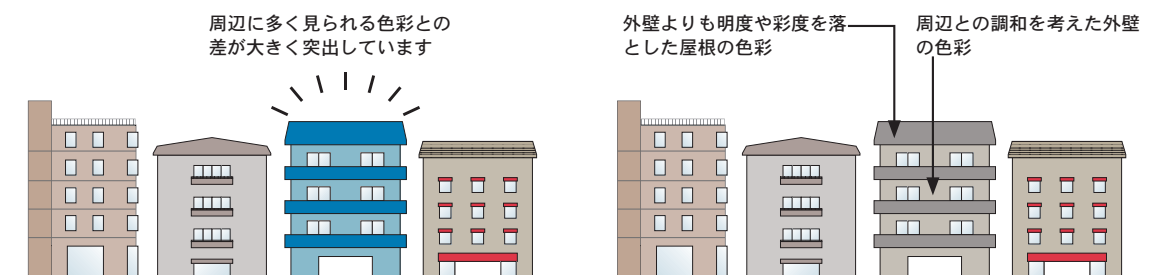
建築物の色彩を考えるときには単体としてのデザインだけでなく、まちなみとしてのデザインにも配慮することが大切です。魅力的なまちなみは建築物の価値をより引き立てるものです。

●外壁の色彩

外壁の色彩は地域内で多く見られる色彩から突出しないようにしましょう。小さな色見本で選んだ色彩は、実際の建築物の大きさで見るとより強い印象を受けることに注意しましょう。

●屋根の色彩

外壁よりも低明度、低彩度の色彩を使用すると安定感のある立面になります。丘陵地や高層ビルなど高い位置から見下ろしたときの見え方にも配慮しましょう。



●建築物の色彩シミュレーション

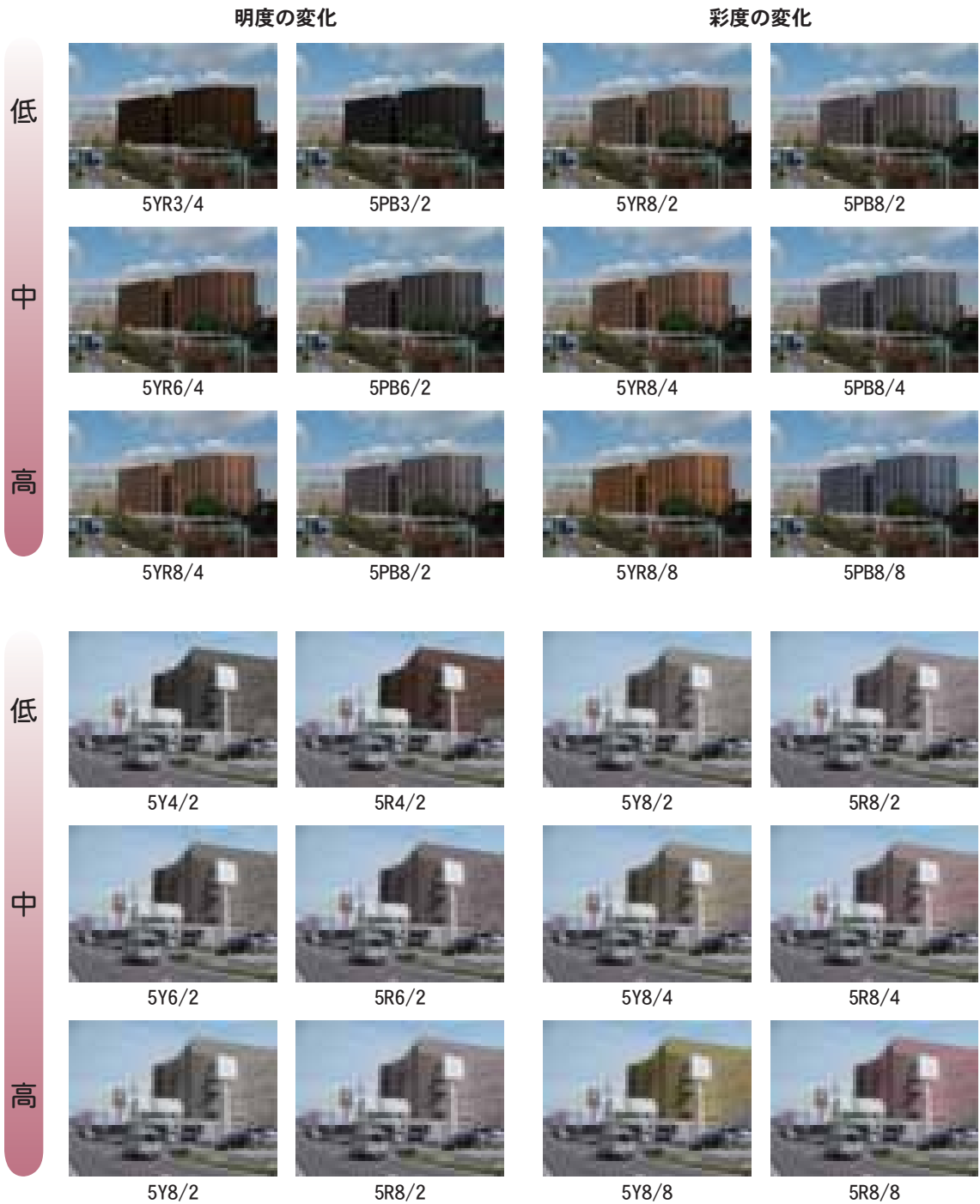
大規模な建築物等はその外観の色彩が周辺に大きな影響を与えます。

大規模な建築物の色彩の明度と彩度を変えて、見え方をシミュレーションしました。

明度が低すぎたり、彩度が高すぎると、周囲に圧迫感を与えたり、周辺から突出してしまうことがわかります。

堺市景観計画では、大規模な建築物のベースカラーとして使用できる色彩の範囲をマンセル値で示しています。

詳細は 19 ページをご覧ください。



色づくり指南 3 素材と仕上げ

壁面の光の反射が強いとまちなみに違和感を与えるばかりでなく、反射した光による眩しさや商品の色あせなどの悪影響を及ぼす可能性もあります。明度が極端に高い色彩（概ね明度9以上）を避けたり、反射や光沢の強い素材を用いる場合には表面の仕上げを工夫するなど、自然な表情をつくるようにしましょう。



コンクリートの打ち放しのマットな質感を活かした例



石貼りの壁面で重厚さや存在感を演出した例



表面に凹凸のある素材は照り返しを抑える効果もある

色づくり指南 4 サブカラーとアクセントカラー

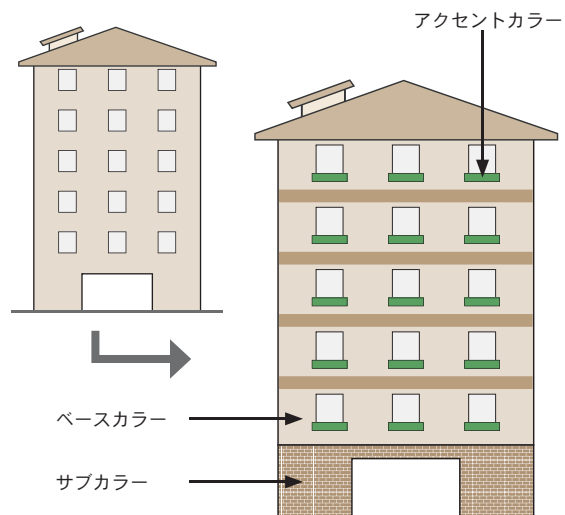
面積の大きな壁面に単一の色を使用するとまちなみが単調になり、周囲に与える圧迫感も強くなります。サブカラーやアクセントカラーを効果的に用いることで変化を持たせ、まちなみを演出するよう工夫しましょう。交差点の建築物の演出や通りに面した店舗のにぎわいを演出する場合などにはサブカラーやアクセントカラーを積極的に導入します。ただし、必要以上に多くの色を用いると、建築物等の全体のまとまり感をなくすことになるため注意が必要です。

●サブカラー

最も大きな面積を占めるベースカラーよりも小さい面積（見付面積※の1/3以下）で使用し、変化や個性を与える色彩です。ベースカラーとの明度差を概ね2以下に抑えるとまとまり感のある立面となります。

●アクセントカラー

デザインのアクセントとして小面積（見付面積の1/20以下）に使用する色彩です。ベースカラーやサブカラーと対比的な色彩を使用することで印象を強めることができます。



※見付面積
建築物の張り間方向又はけた行方向の鉛直投影面積





バルコニーにサブカラーを使って単調にならないよう工夫した住宅



ベースカラーに対して視線を引く色彩を効果的に使用した商業施設

色づくり指南 5 地域の特徴的な色彩を活かす

地域によってはイメージを代表する特徴的な色彩や、風土に特有の色彩が比較的明確な場合があります。こうした地域では建築物の一部にその色彩を採り入れることにより、地域になじんだ色彩景観を生み出すことができます。

地域の特徴的な色彩は 11 ページ以降を参照してください。



隣接する歴史的建築物（写真前）の色彩を壁面に採用した建築物（写真後）



歴史性のある地域のイメージを継承して和風の色彩を採用した建築物

色づくり指南 6 緑が映える色彩

生垣や庭木などの緑が多い住宅地や田園集落地などでは建築物よりも緑が景観の主役です。建築物の外壁などは周辺にある緑よりも彩度の高い色彩を避け、緑にとけ込む色彩を考えましょう。また、紅葉の季節には樹木の色彩の明度と彩度が高くなることも考慮して、紅葉を美しく見せる色彩を考えるなど、年間を通して緑が映える色彩を工夫しましょう。



壁面をアースカラーにして緑にとけ込むまちなみとなっている



壁面の色彩の明度を高めて緑や紅葉を引き立てている

●緑の色彩

樹木などの緑の色彩は GY 系で、明度、彩度ともに 4～6 程度が中心となっています。紅葉の季節には、色相が R～Y 系に移行し、明度、彩度ともに 2 程度大きくなる場合があります。



夏の濃い緑



秋の紅葉

色づくり指南 7 特徴ある形態を活かす（工作物の色彩）

工作物には建築物に比べて大きいものや特徴的な形状を持つものもたくさんあります。こうした特徴的な形態をシンボルとして演出することで景観の魅力を高めることができる場合があります。多色づかいは避け、構造体の機能美を際立たせるシンプルな色彩を考えます。



航空法の制限内で煙突の配色を工夫してリズムカルに演出した例



プラントの形態を活かした彩色により躍動感を演出した例



構造体の特徴的な形態をシンボリックに演出した例



巨大な構造体にダイナミックで力強く魅せる色彩を用いた例

色づくり指南 8 イメージを保つ工夫（屋外広告物の色彩）

屋外広告物はデザインによっては景観を阻害する要素となることがあります。まちなみと調和し、まちなみを引き立てるセンスの良い屋外広告物は企業のイメージも高めます。

企業のC I（コーポレート・アイデンティティ）として決められている色彩の彩度が高い場合には、屋外広告物に使用する際に工夫が必要です。配色を反転する他、彩度の高い色数を減らしたり、同系色にすることによりイメージを保ったまま、周囲からの突出感を緩和することができます。

